# 介護職員自己評価表

2019年1月17日

事業所名 デイケア リハビリセンター前之浜

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
社会福祉士	2人	
理学療法士・作業療法士	2人	4人
看護師		2人
介護福祉士	7人	1人
実務者·初任者研修	2人	2人

※複数資格者含む

#### ◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備考
前回の課題に関する改善	15. 2%	34. 1%	37. 9%	13.6%	

## 前回の改善計画

専門的なトレーニングに関する一貫性の欠く実施と評価が課題であった。なかでも、低負荷でおこなうパワーリハビリは、強化が必要な筋肉を、代償運動を避けて訓練できることから、定期的な研修により幅広いご利用者において実施する必要があった。導入については、メンタル的な関わりが求められ、一環として回想的な取り組みで、トレーニングに「やりがい」をもってもらう計画であった。そのため、生活歴を詳細に把握し、気の合うご利用者どうしでおこなってもらうことを目指した。適切なグルーピングは、懐かしい昔の話を自発的にしてもらうことで、家庭環境や性格だけでなく生活環境についても詳細に理解したうえでおこなう必要がある。これについては、事例検討会の開催頻度をあげて、情報共有の質的向上を目指した。

#### 前回の改善計画に対する取組み結果

課題であった、自発的にトレーニングしてもらうための「やりがい」づくりについては、生活歴を詳細に把握するためと、適切なグルーピングづくりに、ミッケルアート回想法を活用した。結果として、絵をとおして懐かしい昔の話をしてもらうことで、ご利用者ひとり一人の「やりがい」に繋がる背景の会話がみえてきた。くわえて、思い出したくない背景や「やりがい」に繋がらない背景を想像する場面もみられた。回想で生活歴を詳細に把握することで信頼関係の深堀に繋がったと考えられた。パワーリハビリだけでなく、デュアルタスクを取り入れた歩行訓練、コグニサイズなど、運動に繋がるトレーニングの参加率が上昇した。

#### ◆今回の自己評価の状況

	確認のためのチェック項目(偏差値)	よく できている (60以上)	なんとか できている (50~59)	あまり できていない (40~49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	16. 7%	33. 3%	41.7%	8.3%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	16. 7%	33. 3%	33. 3%	16. 7%	100%
SECTION 3	食事について	15. 4%	38. 5%	30.8%	15. 4%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	16. 7%	33. 3%	41.7%	8.3%	100%
SECTION 5	排泄について	16. 7%	16. 7%	50.0%	16. 7%	100%
SECTION 6	入浴について	16. 7%	41.7%	25. 0%	16. 7%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	16. 7%	25. 0%	50.0%	8.3%	100%
SECTION 8	服薬について	8.3%	50.0%	25. 0%	16. 7%	100%
SECTION 9	意思疎通について	16. 7%	25. 0%	50.0%	8.3%	100%
SECTION 10	行動障害について	8.3%	50.0%	25. 0%	16. 7%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	16. 7%	25. 0%	41.7%	16. 7%	100%

## 自己評価及び改善が必要な事項

課題であった専門のトレーナーに関する負担感は、知見と経験を重ねる機会を設けることで改善を図った。具体的には、必要となる専門的な知見は、理学療法士が中心となり、社内勉強会と現場指導を定時だけでなく適時実施した。また、介入場所と時間を、理学療法士と合わせることで経験値を得やすくした。結果として、不安については概ね改善したと思われる。あわせて、自発的にトレーニングしてもらうための「やる気」「やりがい」づくりについて、生活歴の詳細な把握と適切なグルーピングづくりにミッケルアート回想法を活用した。回想に関する教育は、社外教育プログラムの活用を進めている。一連のご利用者の「やる気」「やりがい」を深める取り組みにより、参加率が低位推移していた運動に関するトレーニングの参加率が格段に向上した。介入評価は、20区分されたスケール評価で実施し評価誤差を小さくすることができた。一方、回想法などで把握した詳細な生活歴を多職種と高次で共有する仕組みが必要であった。

主任 吉永正彦

特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所

社会福祉学博士 田 中 安 平

## 外部評価者

超強化型老健と併設した通所リハビリテーション事業所であることから、在宅復帰された対象者の利用も多く、高いリハビリニーズがありました。提供するリハビリ支援は、セラピストだけでなく専門の訓練を受けた介護福祉士を加えたチームで取り組んでいることは評価できます。一方、このことは、福祉職である介護職とアプローチが異なる場合があることを配慮する必要があります。対象者が望む場合はよいのですが望まない場合の誘導手法が、介護職には負担となっている傾向がみられました。専門性が重ならない領域があることを配慮する必要があります。加えて、経験の長い介護職ではその傾向が強くなる恐れがあることを注意する必要があります。メンタル支援は、回想法により生活歴を把握し、気の合う対象者のグルーピングを目指すことで図っていました。回想法は、自発的に話す懐かしい昔話に潜むメンタル的な意味を活用した心理療法です。家庭の問題から仕事あるいは生活環境に至るメンタル情報を詳細に理解できる良い機会です。あらゆる介入で活用できる可能性を秘めています。事例検討会で情報共有するだけでなく、対象者情報として多職種で共有することをお勧めします。総合的な評価は、それぞれのご利用者に合わせた支援が提供され、介護職の教育も積極的になされている場合できました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央6丁目51